

液状処理細胞診による 子宮内膜の細胞像について

株式会社 東海細胞研究所
竹中麻紀代(CT) 牛丸一樹(CT)
坂本寛文(CT) 田中卓二(MD)

はじめに

我々は、前回の第50回日本臨床細胞学会秋期大会において、子宮内膜検体をBD SurePath法にて子宮腔部頸部検体と同様に処理をすることで良好に標本作製され、判定可能であったことを述べた。

今回、非腫瘍性の子宮内膜細胞像を中心に報告する。

【対象・標本作製方法】

- 2009年7月から2012年4月までBD SurePath法にて標本作製された子宮内膜3440検体を用いた。標本は、BDプレップステインTMシステムを使用し、BD社が推奨する標準の婦人科子宮頸部用のプロトコルで作製した。

【症 例】

	症例数	割合 (%)
陰性	3,365	97.8
疑陽性	38	1.1
陽性	7	0.2
検体不良	30	0.9
合計	3440	100.0

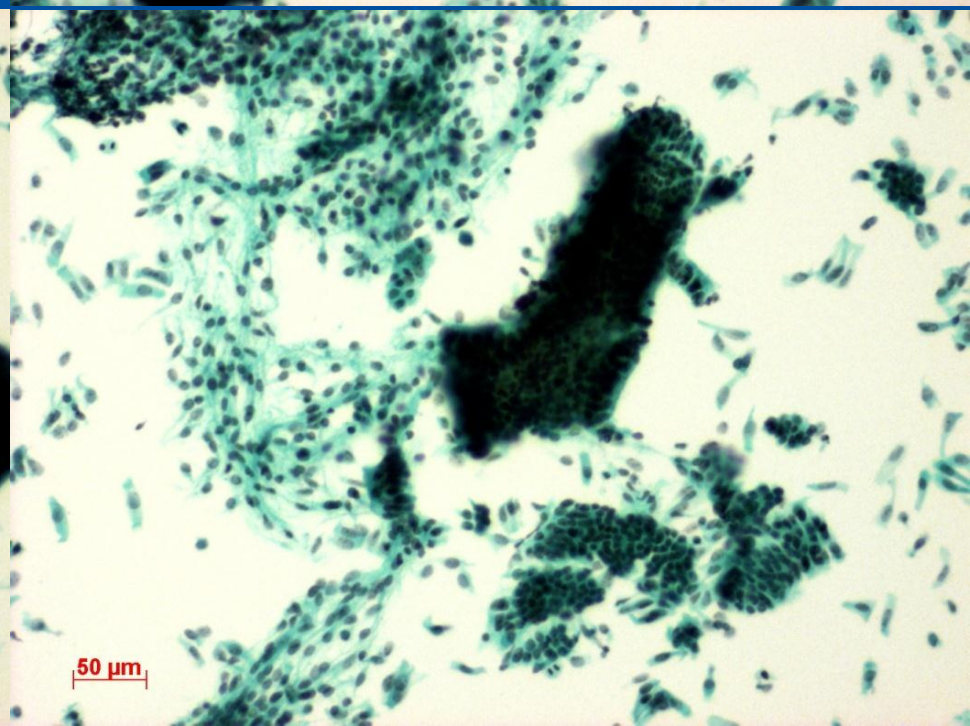
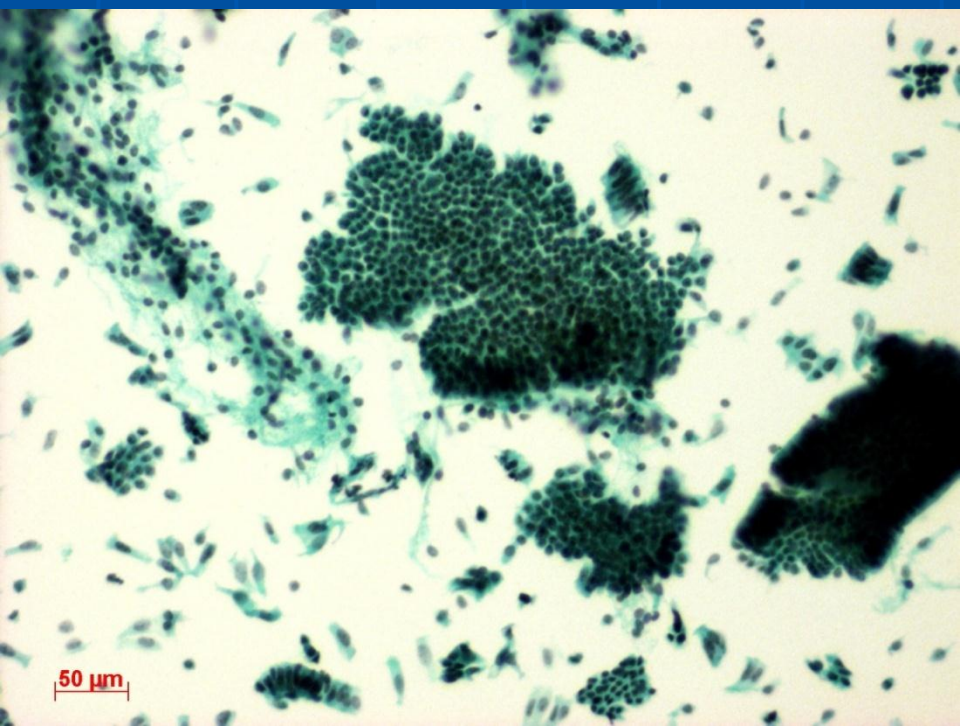
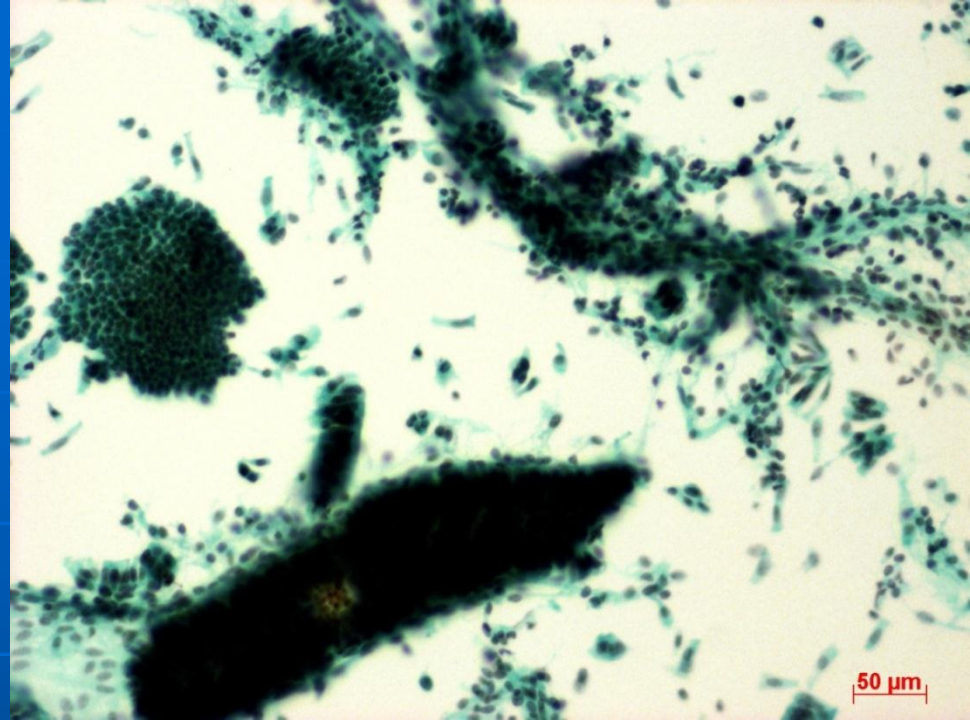
【細胞所見】

- 背景は，過剰な粘液や血液細胞，細胞破片などが除去されるため，従来法より清明であった。
- 内膜腺細胞は，孤立散在性に見られるものと，土管状あるいはシート状集塊で出現し，その立体構造の把握は従来法より容易であった。

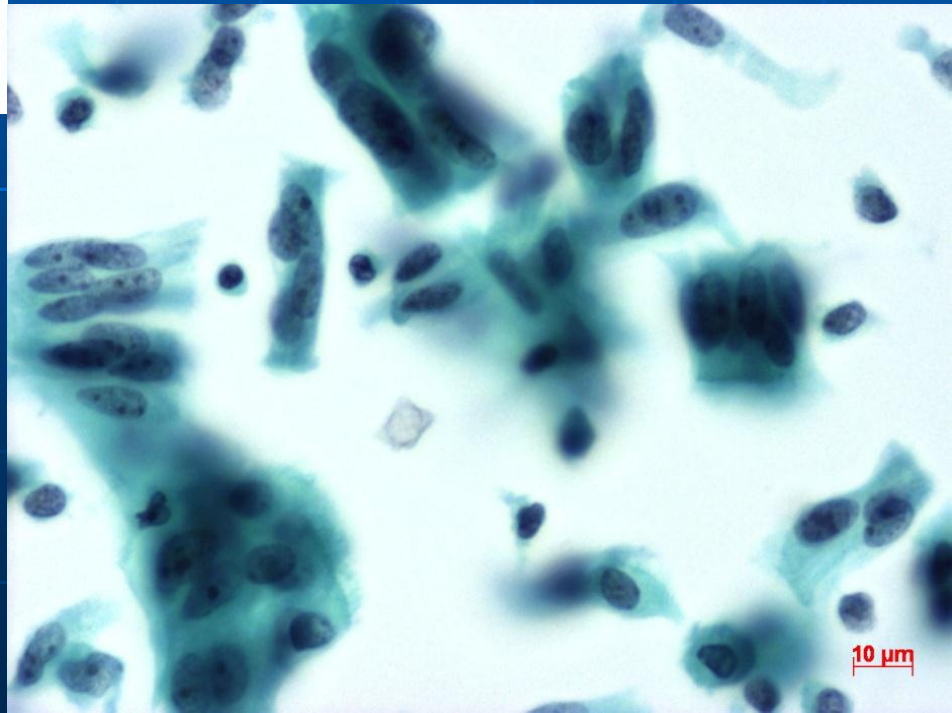
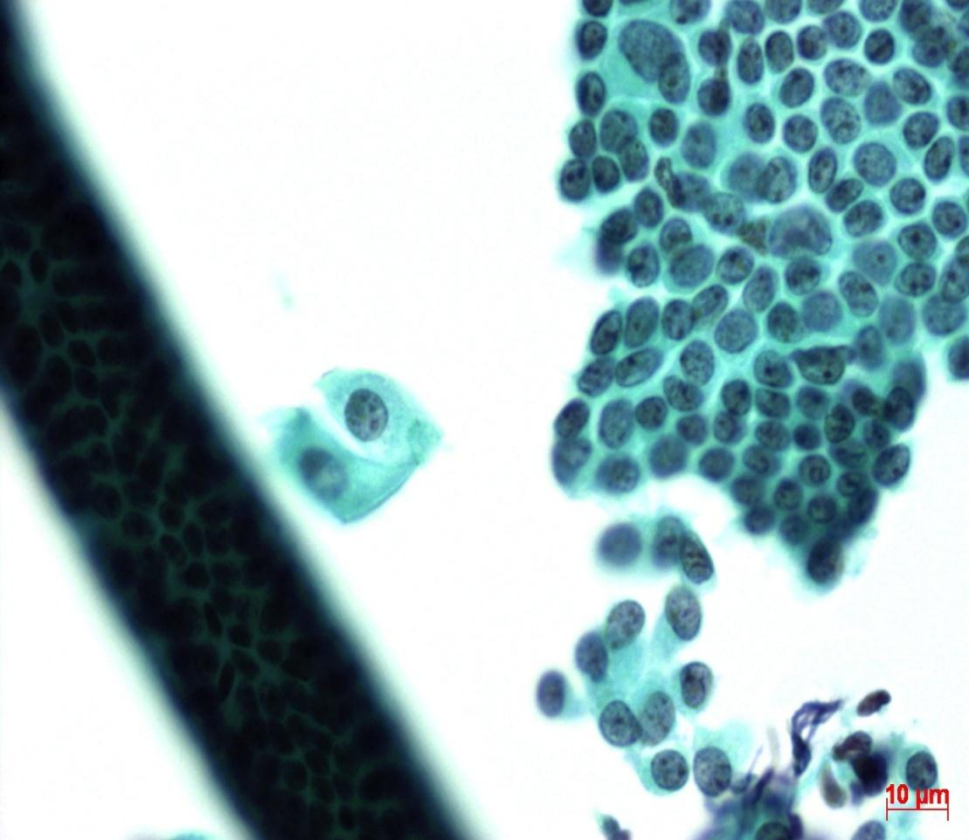
【細胞所見】

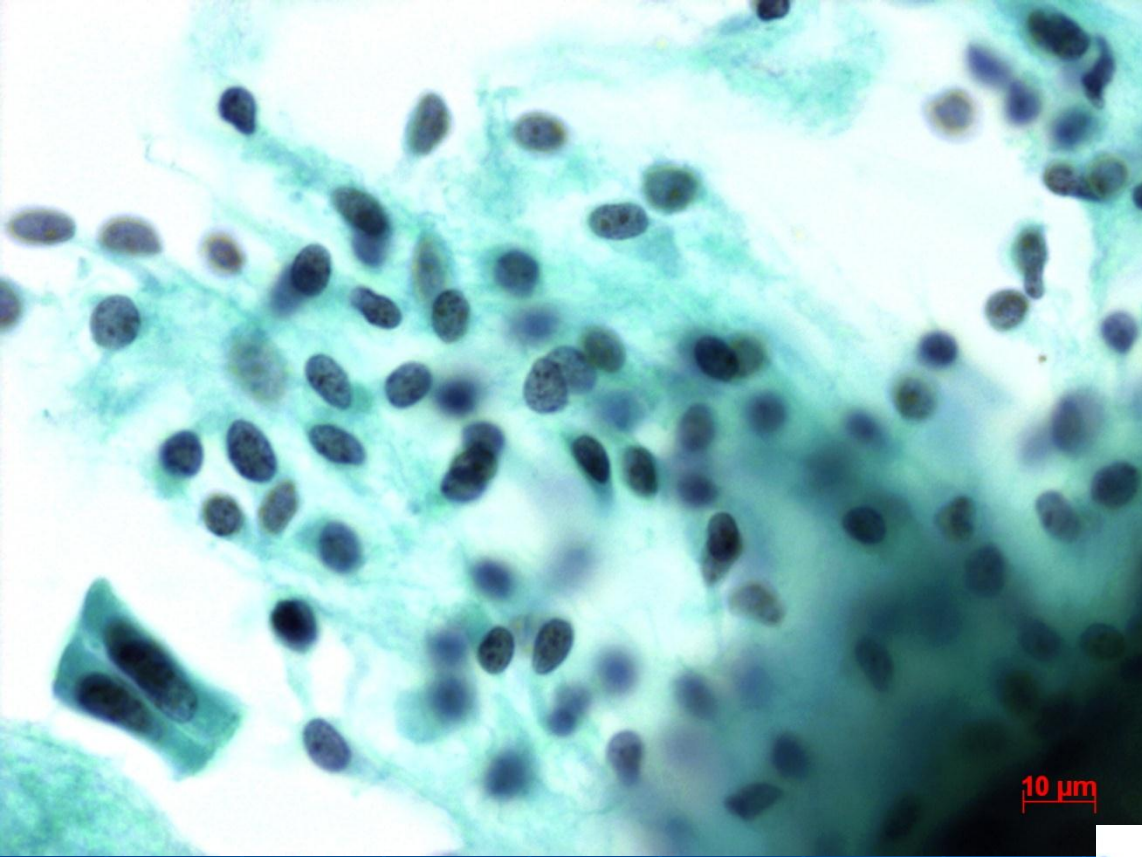
- 間質細胞は、線維状の集塊で観察され、従来法のように孤立散在性に見られることは少なかった。
- 当施設では多数の施設から検体を受託しているが、液状処理での子宮内膜標本の塗抹に施設間差はみられなかった。
(使用採取器具：8種類)

シュアパス標本内膜の弱拡大像



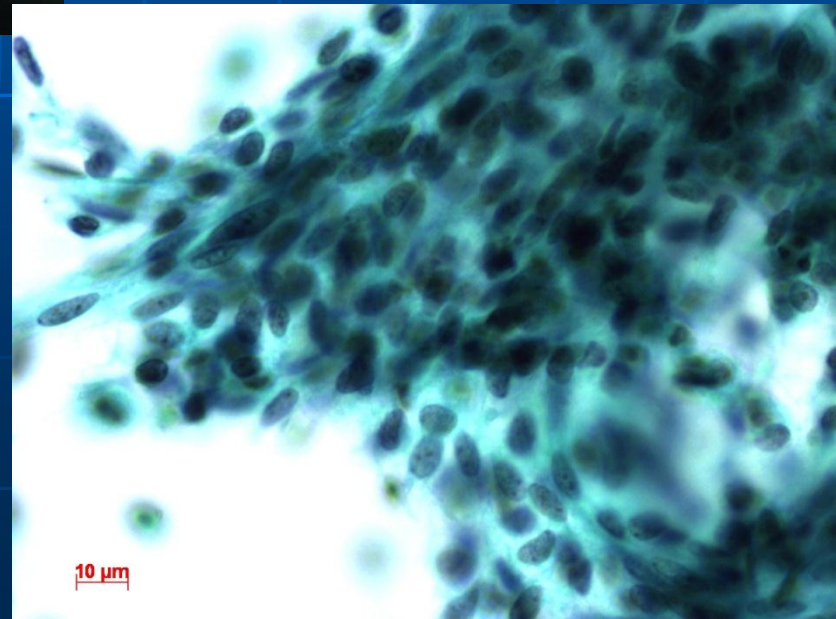
上皮 (土管、シート、孤立散在)



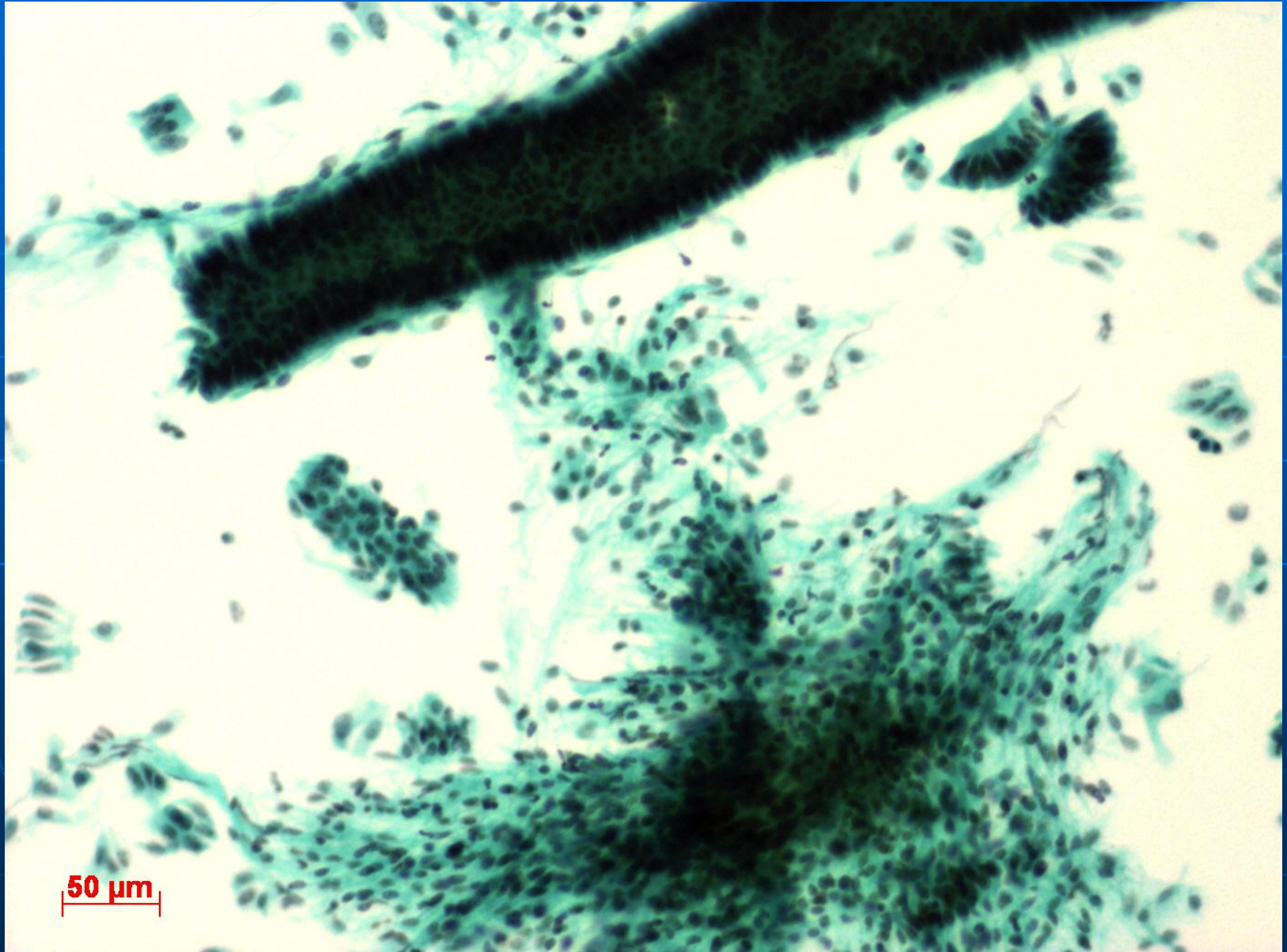


間質成分(対照:上皮細胞2個)

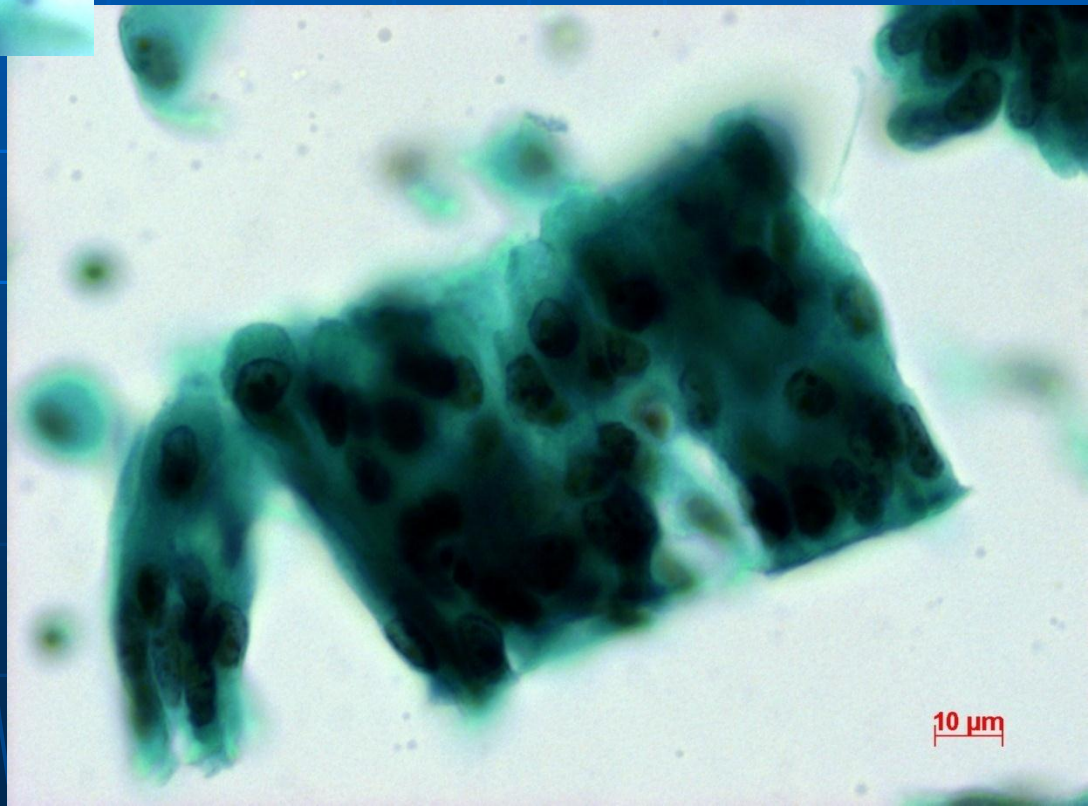
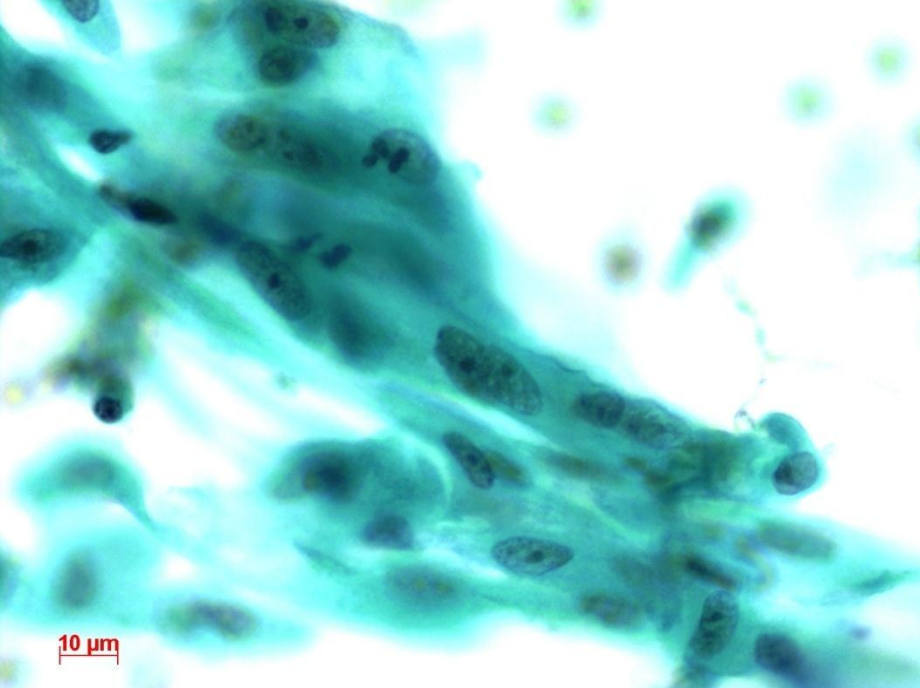
線維状の集塊



間質付着土管状上皮、線維状間質

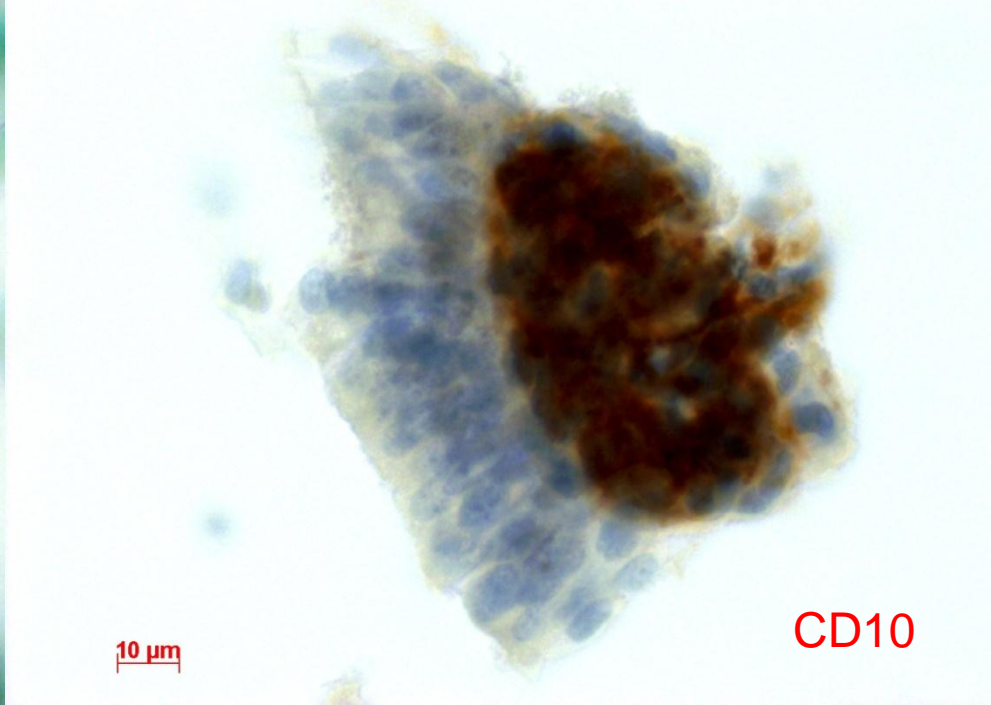
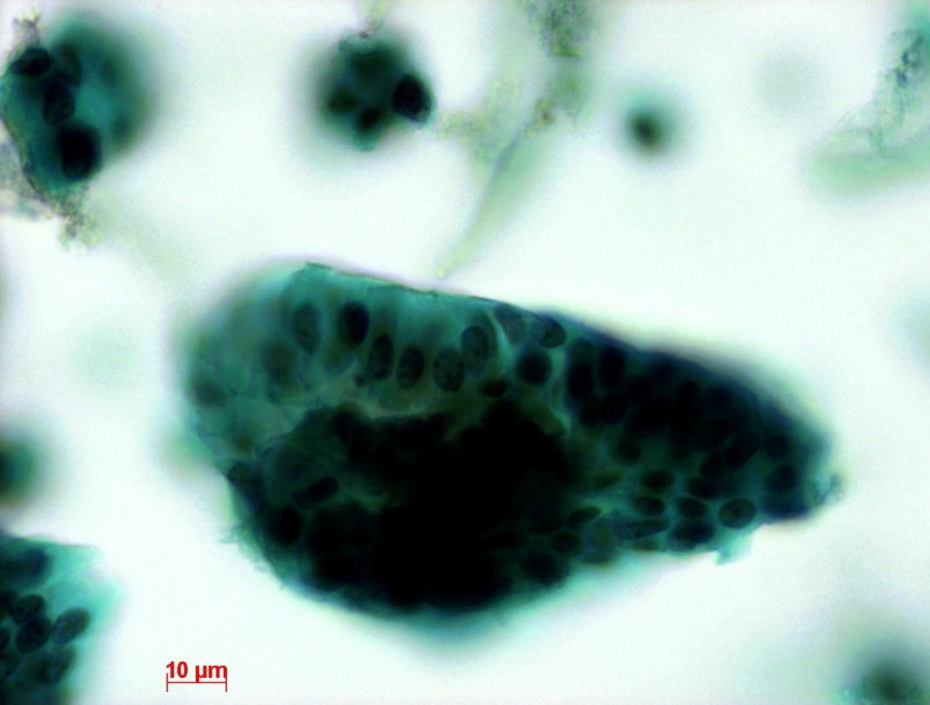
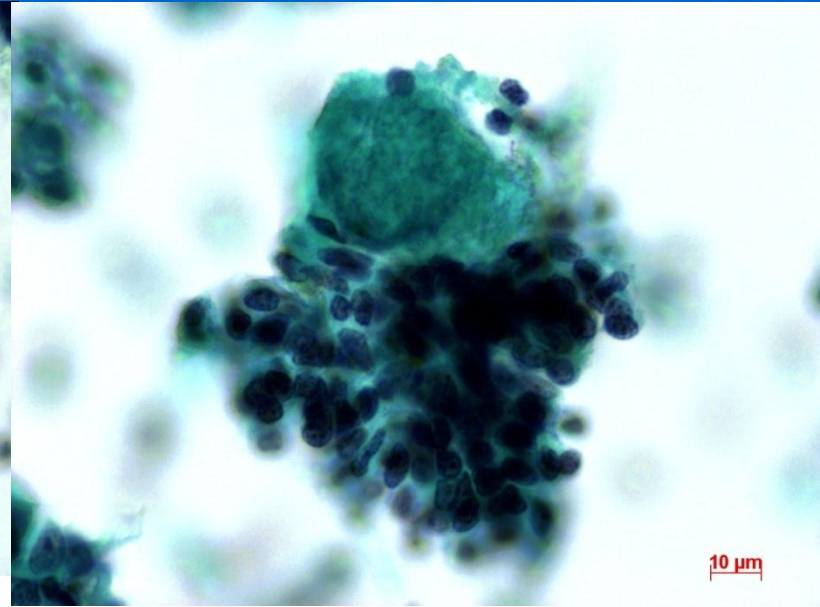
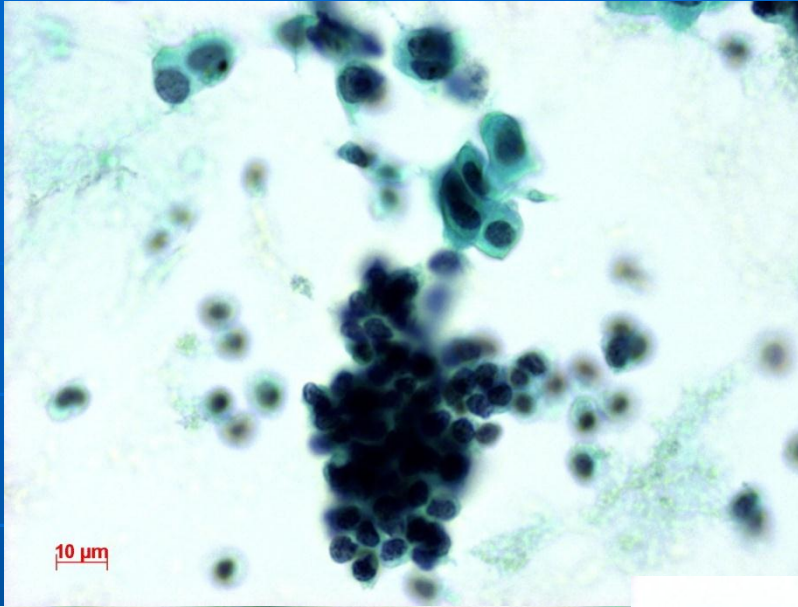


修復と過形成

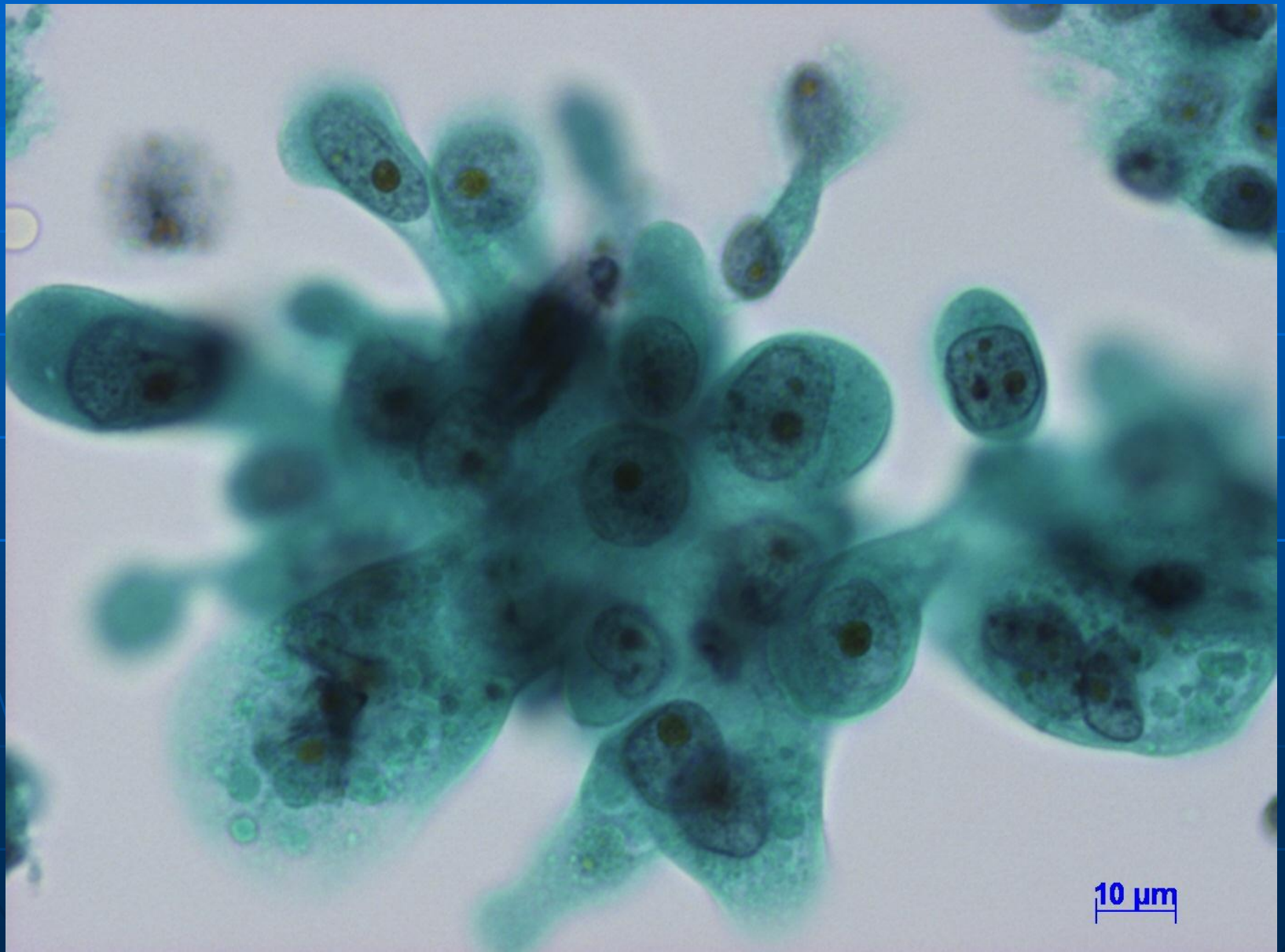


ホルモン環境異常 (EGBD)

間質凝集集塊/血小板成分



類内膜腺癌 G2



【考察】

液状処理による子宮内膜標本の細胞所見は、従来法とは異なっており、その原因として、

- 固定液中の細胞浮遊液での検体提出
- ボルテックスミキサーやシリンジ操作による
攪拌
- 分離剤を用いた2回の遠心の影響

などが考えられる。

【結語】

- SurePath法で作製された子宮内膜標本は、その特殊な標本作製方法により従来法とは異なった細胞像であった。
- 従来法に比べ、背景は清明で、内膜腺細胞と間質細胞の区別が容易であった。
- 鏡検の際には、これらの特徴を十分理解した上で行うことが肝要であると思われる。

第53回日本臨床細胞学会春期大会 COI開示

筆頭演者名;竹中 麻紀代

今回の演題に関して開示すべきCOIはありません。